若越郷土研究

5の3

二人大道の考察

武藤正典

大道に関する文献

日本社会事業史上、永く讃えるべき偉大なる人道者、大道の系譜に就いて種々探究したが参考資料となるべき文献が少なく非常に困難であつた。記録として現存されるものには「越前人物誌」（明治四十三年発行、福田菱州著）には敦賀生れ、天保年間の人で死亡その他不詳とある。「鷹巣村史」（大正八年発行）並に「僧大道」（昭和十三年発行、関東中学校教諭、和田幽玄著）の大道は月輪真成の研究による昭和八年八月の謄写、「僧大道の偉蹟」第二稿の印刷物をそのまゝ引用したものである。「若越墓碑めぐり」（昭和七年発行、石橋重吉著）には僧大道敦賀の人、真宗大谷派の僧、夙に済世利民に志し三里浜に植林し、又鮎川道を開拓す、天保年中の人なるもその歿年不詳。「仏教社会事業史上」（昭和六年発行、谷山恵林著）には、越前の大道と称し行蹟が述べられているだけで素性には全然ふれてはいない。以上のほとんどは、坂井郡石新保村願念寺住職月輪真成の調査研究によつたものを引用したものである。月輪真成は慶応三年に生れ、昭和二十年、七十九才で死亡、明治十六年大学寮に学び明治二十六年東京哲学館を卒業、人類学を専攻、郷土史学にも尽力され、明治四十年頃より大道の研究を始め、大正七年春嶽文庫の件で当時郡長並木が彼を訪問した折、古写本、秀康卿行状一冊並に気儘記八冊の借写と共に大道の記録と今迄の稿本を装釘して寄贈されている。

「福井県自民政資料」（明治四十五年二月発行、木戸正栄著）には、大道に就いては「俗名を香西太郎右衛門と称し福井藩士なり。生活寡欲、故ありて流浪し剃髪せるものなるが、一身を済世利民の業に委し諸方を遊浪せり。その主なる事業は坂井郡三里浜に植樹し、今や千三百町歩の砂浜はその形変じて松林たるに至らしめること、延長七里に渡る鮎川道の開拓を為したることその事績赫々たるものあり。」この外「坂井郡誌」（大正元年九月十五日発行）の大道は、俗名、香西太郎右衛門と云つて、福井藩の武士で、御金奉行を勤め、祿高二百石であつた。祖先は香西備前守と云つて加州に住し、豊臣氏の為に亡ぼされ、後世、福井初代藩主、結城秀康に仕へた。太郎右衛門は重臣にして勘定奉行の役柄、藩金を融通し、その罰により浪人となり、得度出家して名を大道と改め、初めは妻の里、坂井郡大安寺村天菅生に住して、後に三里浜方面に於て、植林、道路開拓等衆人の為に尽すと記載され、天保年中の人にて墓は門弟が建て、福井市呉服町清源寺にある。従来の月輪説とは全然別個な素性であつて郷土史の文献上、困つたことには功績は同一であるが、二人の大道が存在していることになるのである。その何れかが正確であるかは今後まだ研究の余地があるが、先づ両説を述べて見ることにする。

月輪真成説の大道

月輪研究に依れば大道は水雲子又は大王路と号し、明和五年（一七六八）敦賀大黒

町真宗大谷派唯願寺の三男として生れ、生涯妻を取らす独身生活を以つて一貫し、兄弟三人で長兄、願成は唯願寺を継ぎ、次兄、霊観は本願寺学僧香月院深励の弟子で、二十七才の時、石川県江沼郡塩屋西栄寺住職となる。弟、大道も香月院の社中で高倉学寮の寮司を務め、文政二年五十五才で敦賀に於て「帰命」の字訓を講じたと云う。

霊観は西栄寺で六十六才を以つて歿し、大道は霊観とは一つ違いの弟で霊観より四年後天保十一年二月十一日（一八四〇）七十三才で馴染深い三里浜九頭龍河畔、泥原新保の古銭屋善兵衛旅宿の一室で、日本海の奥底知れぬ寒さの中で客死した。遺体は西栄寺に運ばれ、天保十一年二月十六日葬られた。西栄寺過去帳飛落集の天保十一年の条に、「迎人役僧恵明、う玄屋興兵衛、川勘左衛門、家来、酉の男、相頼み駕籠持参引取、十四日大聖寺へ罷越し触頭へ以書附相願ひ葬式の儀御聞屈有之、十六日葬式も於本堂巳の刻」と記してあつて、本堂後の自然石が大道を荼毘に附し骨を埋めた墓石であると伝えられている。

西栄寺は大道の死亡後二回の火災に会い、大道の筆蹟として伝えられているものには次のごとくである。

「阿弥陀経写本」一巻

「千字文六曲屏風まくり十二枚」落印には天保十巳年九月二八日、大道七十二才記す。

「額字二枚」一枚は「雲明軒」一枚は「松林風」の三字額で奥書に水雲子と落印がある。その他「落書鉄本類」には「父母在時身遠遊。家貧兄耋不堪憂、今度況復逢凶銭、我亦如何七十秋。」天保八年は有名な飢饉で大道は七十才の時の漢詩である。

無有出離之縁
漆工塗器真可鑑。美人新粧鮮於花。
哀哉異生雑毒善。須臾豊壁落為泥。
天保七年時余在越福城
天降淫雨何日止。遠近連海水蕩々。
下民莫総有蓄積。骸満行路又寒川。
望遠台（塩屋弁天巌上）
白砂松岸有波流。時近中秋月似鈎。
此地好窺千里月。東西南北望悠々。

西栄寺過去帳の劈頭に飛落集序とし大道が落書した一文がある。

或問曰、飛落者何謂、曰孟子曰王者之迹熄而詩亡、然後、春秋作、晋之乗楚之檮机魯之春秋其実也、然即無大無小、無儒無仏、皆有事即必記之也、記事者以事桂日桂月以月、桂時以時桂年也、今之飛落者乃春秋之義也、春花之飛、秋葉之落、所以花喩少壮葉喩老火也、爰摩松山有一冊子、此中専記古往之人名及其年月日時、於中有牖下死有遠行死有海中死、雖異其処以死道一、噫哀哉、此小聚落猶、載其死名満千冊子、況於其骸骨乎、実如丘岳乎、開巻即寂々寥々猶如春花之落秋葉之飛也、後之君子若開此集即不堪寂寞而任運称南無阿弥陀仏也必矣、況於其子孫乎、是為序。

また大道の次兄、霊観に対する「霊観上人異骨記一巻」がある、これは亡き次兄霊観に対する追悼の所感を録したもので、奥書には令兄、応声院霊観上人七七日の前日書於残、弟林寺南窓下水雲子大道落慎記とある。

その他、大道が福井城下より霊観に送つた書信が現存され、それには郊外の景色に鳥居を配せる軽い墨絵に一葉添え、文面は

御病気いかゞ御入被成候哉。寒気相催し随分為法養生専一に奉存候。近日は福城滞留仕候。為御見無野面差上申候御笑見被下度候。前々略言候。不宣。

十月六日　　大道　拝上
応寿院様　御机上まで

又、盛夏のある日、田舎の道場寺か草庵

に参詣している善男善女を前に法義を談じている法師を描き「群参に声のとゞかぬ暑さかな」の俳画が一枚現存されている。

天保四年秋、大道（六十六才）が住みなれた南樽原の草庵を去つて塩屋村西栄寺へ旅立つ船中から沿道の九頭龍川、浜坂村、北潟浦等の風光が美しく描かれた紀行文も伝わつている。

暮秋遊賀州道之記

天保四年九月中旬楢原の山庵を辞して将に賀陽に遊ばんとす。天菅生村に至り湯泉に浴すれば日こゝにくれぬ。其日九頭竜川の岸なる新保花川氏に信宿す。其明日つとに竜河を舟にして三国の棄師道より野外に出ぬ。此日晴日に逢て四方山みな秋の色なるに白嶺独り白雪のつもるこそ心細けれ。近く水田をみれば黄なる稲の半は刈りしあとに一群の鴈のさわぎたつ声こそいともあはれにおぼゆれ。西を望めば海色の天と共に青く白帆の舟のあまたわたるこそあやうく覚ゆれ。ゆく〳〵前路にすゝめば蕎花の白き数里の野原なり。小路さしはさみて青々と蔬菜のその中に交はれるものあり。其より暫く往けば早や小巻と云処なり。此より舟に入りて湖水に棹し左右を顧れば皆漁家なり。各々網を夕陽にさらす。其中にも精舎の鐘声の響くこそ最も殊勝に覚ゆれ。水面には種々水鳥の浮びたる中に鵜の鳥独くちあげ、そら見して游ぎ行ありさまこそにくきものなれ。往く〳〵吉崎に近けば松ひとり聳えたる、又瓦屋根の楼閣参差たるありさま、宮室うちつづきし廊下などの尚も昔よりまさりて白壁の新なる悪世に稀有なる、仏法の弘まれる相こそ不思議に覚ゆれ。こゝに鹿島の名山は欝々蒼々として四方の砂山にも似ず。古木の千株萬茎本枝百世にしげるこそ世にも稀有なる山なれ。神仙の止まるに非ずよりんば争か如是なるあらむ。山は高きに非ざれども仙あれば霊なりと云へり。その樹はしひ、たも、もち、椿など多し。稀には松柏もうちをいたるあり。其枯枝の梢まで蔦の紅ひなるが斜陽にかゞやくこそ元信が筆にも及ばれまじく覚るなり。程なく塩屋浦の河に舟をよすれば舟人慇懃に余を礼して舟に棹して去りぬ。遂に摩松山に登り、先ず仏世尊を礼し敬て次に院に入て相慰問し恙なきを喜び後園の松の盛なる宝蔵皷楼客殿のよそほひまで行届て全備せるなり。こゝに茶を煮て清談おぼえず時をうつせば坐やゝ久しくて夜もはや初皷をすぎぬ。賓主互に礼を述べて退きぬ。明日西野氏に過る。達磨御像に賛詞の加へたるが壁間に掛れり。偶は大師伝法の偶なり。即ち沢庵老師の筆なり。彼師啻に道徳の誉れあるのみにあらず其の雅思淵才はかるべからざる知識なり。古き家には古き器のあるものとぞ覚ゆる。家のすまいも二十年前にかはらねどその繁昌のすがたいかにも積善の余慶とぞ覚ゆる。数椀の茶を呑て珍重して退き、又門を出れば鹿島沙山みな奇絶の好景なり。吉崎の鐘の響くをききいさゝか徘徊して本処にかへりぬ。（下略）

此の外、坂井郡川西村剣大谷、時沢平左衛門宅に、専ら大師流を学んだ「いろは」四十八字の大道の筆蹟が現存され、「天保七丙申　大道慎書花押」とあるが、この経路等は全然不明である。又同村江上、久津見次郎左衛門宅にも大道書の三字額「能道修」と云うのがあつたが、福井震災で焼失されたことは残念である。

福井藩香西太郎衛門出家説の大道

此の説は中谷文作氏が南楢原で昔からの古老の云い伝えを聞いたものであると云う。私も楢原に於て村人達に直接会つて種々大道に就いて尋ねたが、如何なる素性の人で、何処から来て何処で死んだかは全く分らない状態で、ただ道を作り、橋を架し、抄紙業を奨励した伝説があるだけで、昔大道と称せられた人が楢原で住み、村人から親しまれていたことは事実なのである。大道が晩年居住したと伝えられる草庵の跡が南楢原の山の中腹の傾斜三角形の処

にある。幅三間、奥行五間程の遺跡地で、今は跡形はなくて荒果て雑木雑草が生繁つて、村の古老三ツ田利平氏連れて行つてもらつて示され、ようやくわかる様な処で、老人の言葉では四十年前まではまだ宅地跡の形態が残つていたが、今は全然その面影さえ見当らない。前面は遥かに越前平野を一望し、向う重なり合つた山岳の間に白山連峯が望まれて、眼下には九頭龍川、日野川の清流を見下す景勝の地である。宅地跡前は小さな坂道で、その脇に小さな岩清水が流れ出で、大道がこの水を飲んで生活したと云つて村人は今でも大道水と称し、細々しいが年中切れることなく流水し、昔の大道を偲ぶに足る風情が残つている。

南楢原には大道の伝説や比較的確かな史料もあつたが、古老も死亡し、明治四十二、三年頃部落が丸焼きとなつて、総てが焼失され公的記録が現存されていないのが残念である。大道が抄紙業のため丹後国より取り寄せたと語る叩台丹後写石五、六個現存され、三十年程前迄は盛んに抄紙業が行われ、半紙、ユトン紙、防水紙等が生産されたが、今は会社組織となつている。幅三尺五寸、長さ四尺、厚さ一寸五分程のこの石が村にあつて、大道を偲ぶになつかしい遺品の一つである。この外村人の為に残して行つたと伝えられる阿弥陀如来画像が一幅、牧広海の寺にあるが、裏書には方使方身本願寺釈教如、年号は薄れて読めないが記入されている。明治初年大道の五十年忌法要が三ツ田利平方で村民相集つて営んだ事実によつても、大道の感化が村民達に如何に親しまれていたかゞ分るのである。

香西家の菩提寺、福井市呉服町浄土宗鎮西派清源寺住職大正念従氏も四十年程前住職拝令の折、当時の門徒総代、仙石亮氏（工学博士、昭和十六年十一月、八十八才で死亡）より香西太郎衛門が藩金を浮貸してその罰により出家し大道と名乗り、三里浜、鮎川道路開拓に甚力された旨懇に聞かされたと語る。清源寺は戦災震災再度の焼失により記録的なものは全部焼失し、墓も都市計画のため田原町、足羽山の共同墓地へ移転され、又香西家は子孫が無い為、いろんな古い墓は無縁墓として葬り、最も新しい一墓だけ共同墓地にあるがそれは昭和二年頃の墓である。

春山下町五十嵐均平翁（八十四才）も老父より仙石亮と同じ意味の大道を聞いておられると云う。五十嵐翁の言葉では、この事件は藩が財政上非常に窮迫し香西太郎衛門は勘定奉行吟味の手前、藩は表沙汰を非常に恐れあくまで祕事として取扱つた関係上、藩史等の記録には記載されていないのであろうと主張される。事実松平文庫の諸書を明細に調べたが香西太郎衛門の出家したことに対しては一行も記載されていないのである。而し片聾記四の中、「御預所御金奉行」の件とし次の文がある。

御預所御金奉行小倉平左衛門悴共に不慎之義に付八月五日父子共に違慮被二仰付一、御金引屓之趣に父子共付達も有レ之候哉、同月十一日平左衛門は一家へ相守候様被二仰付一、下代坪川宅右衛門と申者も一家共へ御預に付何も相詰罷在両人引屓金高いろ〳〵評判も有レ之、諸方へ貸付候趣之所、宅右衛門貸付は急々取立候処大概揃様にも申触し候処、宅右衛門義無レ程御勘定所囲出来被二指越一、平左衛門は兄横井久太夫方へ引取候様被二仰付一、御吟味之上十月十六日平左衛門も同断両人共に家内闘、所被仰付其後両人共に御追放平左衛門悴両人有レ之久太夫方に押込被二仰付一置候処、両人共に御追放被二仰付一過分之御損金に相成候由珍敷事に候。

この件は天明三年八月頃より十月頃、藩主は十二代重富時代で十代宗矩時代寛延年間の御給帳には御勘定奉行百石香西太郎右衛門と記載され、宗矩治世十九年、十一代重昌治世十一年で天明三年は重富藩主の初期時代で勘定奉行も引続き香西太郎右衛門であつたのであろうと推察は出来るが、大道の死亡月日が不明である以上この事件に結びつける事は出来ないのでなかろうか。

清源寺の香西家の過去帳には次の如く書いてある。

教山院心挙良円居士
天保八、五、　四、香西太郎右衛門
心教院頓挙妙相大姉
天保八、六、二十、香西太郎右衛門の妻
幻済童子
天保八、九、廿三、香西太郎右衛門の子

三人が同じ年に死亡しているが、この年は有名な天保の大饑饉の年でもあつて別に不思議ではない。

かくて香西太郎右衛門の出家した公的記録も発見さず、過去帳に大道と云う法名も発見する事は出来なかつた。しかし一面記録を残すべき必要もなかつたのでないだろうか。当時の社会にあつて藩主は絶対的で藩史等は支配者の歴史であつて、藩で起つた各種の事件等都合の悪い部分は全部隠され発表されずに終つたものが多く、事件を明らかに書きたて批判すると直ちに処罰されたので、大道の事件も当の被害者が大道自身であれば表だつて取上げなかつたのも当然と云えよう。特に大道は罪ほろぼしの為出家した関係上、又接した庶民はほとんど文盲にひとしかつたので、正確な史料は今後と云えども恐らく発見されないのでなかろうか。

尚この小論文に対して特に、元春山小学校長五十嵐均平氏、願念寺住職、月輪孝成氏、大安寺村、時沢平左衛門氏の尽力を得たことに深厚の謝意を表明する。